



書評

並木頼寿・大里浩秋・砂山幸雄編 『近代中国・教科書と日本』(研文出版)

川尻 文彦 (愛知県立大学外国語学部 准教授)

東京で並木頼寿先生を中心に近現代中国の教科書についての共同研究が行われているという噂をかなり以前に耳にしたことがある。その時は、どのような研究なのか気にはなったが、いずれ本にまとめられて出版された時に読めばよいと思っていた。それが並木先生の思わぬ急逝によって、論文集が急遽まとめられることになった。それが本書、並木頼寿・大里浩秋・砂山幸雄編『近代中国・教科書と日本』である。執筆者は共同研究のメンバー(並木、大里、川上、川島、黄、孫安石、砂山)に加え、当該テーマについて専論のある者(土屋、孫江、陳)もあらたに加わって、より包括的な専門研究書としての色彩を濃くしている。紙幅も限られているので網羅的な紹介はしない。本書の目次は以下の通り。

総論(砂山幸雄)

第1部：教科書という装置 清末民国期における教科書(川上哲正)、近代中国の小中学校における歴史教育概観(大里浩秋)、清末民国期国文・国語教科書の構想(並木頼寿)、南京国民政府と教科書審定(孫安石)

第2部：教科書と近代思想 連続と断絶—20世紀初期中国の歴史教科書における黄帝叙述(孫江)、清末民国期における中国原始社会像(川上哲正)、清末・民国期地理教科書の空間表象(黄東蘭)、清末・民国期地理教科書の日本像(黄東蘭)、清末の修身教科書と日本(土屋洋)

第3部：教科書の政治学 「支那排日教科書」批判の系譜(砂山幸雄)、日中外交懸案としての教科書問題(川島真)、植民地朝鮮における教科書事件(陳紅民/中里見敬 訳)、1936・37年華僑学校教科書取締まり事件(大里浩秋)

資料編：教科書の発刊情況—清末から民国22年まで(川上哲正)、『日華学報』に見る「親日政権」下の教科書検定の動き(大里浩秋)、あとがき(大里浩秋)

着実に進められていた共同研究がこのような形で日の目を見ることになったことを喜びたい。本書の底流には、中国における愛国主義教育、歴史認識の問題提起から日本の歴史教科書問題をめぐる日中間の解きたい認

識のずれに対する憂慮がある。編者たちが念頭におくのは、日中間のいわゆる「歴史教科書」問題は今日にわかには起こったのではないことである。戦前期にも「排日教科書」問題——中国研究者の間でもあまり知られていない——として存在し、それは中国の検定教科書の「偏向」を日本政府が抗議するという、今日とはまるで逆の図式であったのである。この「歴史的な経験」を参照することにより、歴史学者の立場から今日の歴史教科書問題を解きほぐすために一定の寄与を目指している。

本書に収められた論文のテーマは、近現代中国の教科書を日中関係の視野からとらえ直すという点で共通する。私の見る所、そのテーマは大きく2種に分かれる。

一つには、清末時期の教科書の内容分析である。清末時期には明治日本の教科書が直輸入され、その影響が濃い。今日まで続く著名出版社商務印書館はこの時期の教科書販売で多額の利益を得て、経営の礎を築いた。帝政末期とりわけ新政以降「国民国家」の建設が急がれ、この時期の教科書には、歴史叙述(孫江、川上、大里)や地理(黄)、修身(土屋)、国文、国語(並木)といった教科毎に、中国伝統思想の影響と明治日本の影、それに加え西洋に由来する「近代的な学知」の三者の奇妙な混合が見られる。諸論文では、単純な「国民国家」論に墮することのない分析が試みられる。

二つ目は、中華民国期の「教科書」制度をめぐる諸問題である。まず「排日教科書」問題が手際よく整理され(砂山)、南京政府の教科書検定(孫)、また日本による中国の教科書検定制度への不信と外交問題化(川島)が扱われる。ただし、川島のいうように、排日教科書、排外教育がすぐさま日中間で外交問題化したと単純には見做すことはできず、その両者の間の複雑な回路については今後の検討課題である。

以上、大雑把な要約にすぎないが、本書は近現代中国の教科書に関する現時点での研究の到達点であるといえよう。と同時に、未解明の課題が少なくないことも分かった。今後ますますこの分野の研究の進展が待たれる。